

山鼻屯田

第 1 集

昭和52年 3 月

北海道札幌南高等学校

はじめに

昭和51年12月26日

北海道札幌南高等学校長 松本利一

先日、塩見先生からこんな相談をうけた。「今年の夏休み、1年生の地理の課題として屯田兵制度についてのレポートを提出させた。読んでみると、しっかりした面白いものが多いので散逸させるのが惜しい、是非整理して冊子にしたい。若干の経費がかかるがどうだろうか。」と、私は「結構なことだからおやりなさい。」と勧めた。

私が屯田兵制度について学んだのは旧制中学の5年生の頃、ロシア国との国交がゆるがせに出来なかった明治初期、北辺防備と北方開拓の使命を帯びて東北の士族が石狩川流域に集団入植した。このようなことを知識として頭の中につめこんだものである。実際に琴似篠路の地を歩いてみたのは、今から30年前旧札幌二中の教師になってからである。山鼻は昨年学校のそばに住みついてから身近なものに思い出した地名である。

六華同窓会の会長佐藤貢氏は山鼻屯田兵の三世である。聞いてみたら、入植当時の衣服、家財など、わずかばかりのものが父の代まではあったが、現在ではすっかりなくなっているという。1年生の諸君が、いくら残っていない屯田の人達の血筋をたずねて、その方たちの先祖の生活、習慣、思想といったものを蒐集したということは、なかなか大変なことだったろう。しかし文化社会科学の研究に必要な実証的な積みあげを自分の手でやってみたということは貴重な経験である。

山鼻屯田についての資料がほとんどないという今日、この冊子はその面の探求に有力な手がかりを提供するにちがいない。

序

昭和51年12月26日

財団法人 山鼻記念碑保存資産

理事長 佐藤 貢

山鼻屯田兵村は明治9年北海道開拓使時代に設置されたもので、昭和51年で満百年を迎えた。この時に当り札幌南高等学校に於ては、1年生の生徒に、山鼻屯田兵村に関する調査を夏季休暇中の課題として与え、その結果を取り纏めてこれを編集し、世に公表される事となったのであるが誠に欣快に堪えない。

この調査に当っては、生徒が屯田兵の子孫を広く家庭訪問して、各種の資料を蒐集し、また詳細に情報を聴取して纏めたものと聞いているが、その努力に対しては心から敬意を表すると共に、学校当局が極めて時宜に適した課題を与え、生徒の協力を得てこれを進められた事は大きな成果である。

そもそも北海道に於ける屯田兵制度は、黒田長官が津軽海峡を隔てて存在するわが国最北端の未開地であった北海道を開拓するに当って、最も苦慮した問題は、当時樺太に於いて日本人とロシア人との間に色々な面で紛争が絶えなかった事から、北海道の統治に当ってもロシアの脅威に対する防衛を重視しなければならなかった事と、海を隔てた北海道の民生安定の上で、食糧の自給策が緊急な課題であった関係から、屯田兵制度に依ってこの2つの目的を達成する者に、兵農を併せ行なう劃期的制度を設けたもので、けだし世紀の卓見と言って良い。

これは中立国であるスイスが国民皆兵制度で、平素は農商工各種産業に従事しながら、適時軍事訓練を受け、一旦事ある場合には何時たりとも家から銃を持って飛び出すのに似た防衛態勢と言って良い。

この屯田兵が山野を拓き農地を造成し、衣食住の自給を計って郷土の防備を固めた為に、一般住民は安心して本道に移住し、各種産業に従事することが出来たのであるが、大森林に蔽われ、熊や蝦夷狼等の猛獣が横行する中で、開拓の労苦は並大抵のものではなかった。

しかしこの屯田兵のお蔭で、札幌は現在本道の首都として、わが国でも誇るべき立派な指定都市にまで発展を遂げた事は、我々子孫として、祖先に感謝すると共に誇りを感じるものである。

願わくば札幌南高校のこの屯田兵に関する刊行書が広く多くの道民に愛読され、それが開拓精神の涵養と郷土愛の高揚に役立つものとなるよう祈念してやまない。

目次

巻頭言

はじめに
序

北海道札幌南高等学校長 松本 利一 1

山鼻記念碑保存資産理事長 佐藤 真 2

総論篇

(V-6)

山鼻の起源と地誌

13

1. 山鼻の起源と位置 教諭 堀見一夫, 5組 ニッ山美香・北川郁子, 3組 新出 司・津久井薫, 3組 長内登子, 7組 畑山啓造, 7組 藤井淳子・野崎貴代・村西智子
2. 自然 5組 北川郁子

屯田兵制度

15

1. 屯田とは 3組 新出 司・津久井薫, 1組 木村 隆・真鍋 淳
2. 北海道への屯田 7組 野崎貴代・藤井淳子・村西智子, 5組 ニッ山美香, 1組 坂井佳津子, 1組 木村 隆・真鍋 淳, 5組 野見山豪, 3組 津久井薫・新出 司, 7組 畑山啓造, 3組 長内登子, 9組 相馬馨生・高岡正昭, 5組 大槻浩之
3. 屯田兵概要 1組 真鍋 淳・木村 隆, 3組 新出 司・津久井薫, 5組 ニッ山美香, 7組 村西智子・藤井淳子・野崎貴代, 3組 畑山啓造
4. 開拓のようす 1組 坂井佳津子, 1組 唐川久美子, 7組 藤井淳子・野崎貴代・村西智子, 5組 大槻浩之

山鼻屯田

28

1. 屯田兵制度 5組 川合裕美子・高橋敦子・岡和田美加, 1組 真鍋 淳・木村 隆
2. 山鼻屯田の構造 5組 北川郁子, 7組 畑山啓造・村西智子・藤井淳子・野崎貴代, 3組 林 隆夫
3. 屯田兵の移住 5組 北川郁子, 3組 林 隆夫, 7組 藤井淳子・野崎貴代・村西智子, (p.1) 5組 川合裕美子
4. 山鼻屯田兵村開村 5組 井上純巳, 1組 坂井佳津子, 5組 川合裕美子・高橋敦子・岡和田美加, 7組 村西智子・野崎貴代・藤井淳子, 3組 林 隆夫, 教諭 堀見一夫, 5組 北川郁子, 5組 武市 毅
5. 屯田兵の農作業 3組 林 隆夫, 5組 藤井淳子・村西智子・野崎貴代, 5組 川合裕美子・岡和田美加・高橋敦子, 5組 ニッ山美香, 9組 相馬馨生・高岡正昭, 5組 野見山 豪, 7組 小世直子, 5組 大槻浩之, 3組 中村紀子
6. 楽しみ 1組 坂井佳津子, 9組 桜井裕子・酒井由美子・長瀬善江, 3組 長内登子, 7組 小世直子, 5組 野見山豪

日常生活

37

- 1. 当時の山鼻 5組 野見山豪
- 2. 服装 1組 坂井佳津子, 5組 高橋敦子, 川合裕美子, 岡和田美加, 9組 長瀬善江, 酒井由美子, 梅井裕子
- 3. 食べ物 1組 坂井佳津子, 5組 川合裕美子, 岡和田美加, 高橋敦子
- 4. 楽しみ 5組 岡和田美加, 高橋敦子, 川合裕美子
- 5. 建て物 5組 高橋敦子, 川合裕美子, 岡和田美加, 3組 三佐川亮宏, 渋谷卓志, 熊谷要治, 1組 唐川久美子, 教諭 垣見一夫
- 6. 仕事など 5組 野見山豪, 5組 長瀬善江, 酒井由美子, 梅井裕子, 1組 土方洋子

山鼻尋常小学校

41

- 1. 山鼻尋常小学校 5組 梅井裕子, 酒井由美子, 長瀬善江, 5組 川合裕美子, 高橋敦子, 岡和田美加, 3組 長内登子, 5組 坂井佳津子, 1組 土方啓司, 5組 藤田圭一, 3組 熊谷要治, 渋谷卓志, 三佐川亮宏
- 2. 天皇の訪問 1組 坂井佳津子, 5組 酒井由美子, 長瀬善江, 梅井裕子
- 付 膳川学校 1組 土方啓司, 5組 藤田圭一

西南戦争

44

- 1. 西南戦争 5組 井上純巳, 5組 柳沢卓, 7組 村西智子, 藤井淳子, 野崎貴代
- 2. 護国神社 5組 高橋敦子, 川合裕美子, 岡和田美加
- 付 日清戦役出動・日露戦役出征 7組 藤井淳子, 野崎貴代, 村西智子

屯田兵墓地

47

- 1. 屯田兵墓地 9組 長瀬善江, 酒井由美子, 梅井裕子

開村記念式典

48

- 1. 開村記念式典 1組 唐川久美子, 3組 熊谷要治, 渋谷卓志, 三佐川亮宏, 1組 坂井佳津子, 5組 大槻浩之, 5組 岡和田美加, 高橋敦子, 川合裕美子

琴似屯田兵村

50

- 1. 琴似屯田兵村 7組 藤井淳子, 野崎貴代, 村西智子, 3組 長内登子, 5組 北川郁子, 5組 高瀬敬之, 9組 梅井裕子, 長瀬善江, 酒井由美子, 5組 川合裕美子

(4) 山鼻地区の病院

52

- 1. 病院数に見る発展状態 (昭〇〇) あべまさみ (昭51) 1組 武田揚子

(4) 伏見地区

53

- 1. 昭和40年の現状 (昭40) 西村 隆 (昭51) 9組 富山光広

阿部 利平

教諭 塩見 一夫

1. 序

以下は、山皇西屯田に入植した、阿部利平＝あやめ氏の次男、阿部利雄を訪問し、記録したものを、再度利雄氏に詳細にご添削いただいたものである。さらにその味つけとして、利雄氏著「屯田兵の子」を引用させていた。なまこのご著書は小説風自伝で、文中の定男は著者ご自身と判断し、この引用文には塩見の責任で利雄と本名に置き換えさせていただいた。さらに父、吉兵衛は利平に、母さつきもあやめと、それぞれ本名で記載させ

ていただいた。

かくてその内容は、利平氏より二世の利雄氏の部分が主要を占めるが、しかしこれを通じて、屯田兵の一家の生活が伺い知ることができると考え、あえて詳記した。

2. 巨理藩の人々

仙台伊達家6万石の分家巨理藩は伊達邦成^{（1814）}は、幕末の戦いで敗れて賊軍の汚名を被せられ、致し方なく新天地を求めて、数回に分かれて、北海道は伊達紋別に入植した。

屯田兵の先祖が北海道に来た動機は、明治の動乱、即ち維新の折に、徳川幕府方に味方した殿様が、天皇に味方した官軍に追われ、其の後廢藩の改革によって、自分達が生活してゆけなくなって、落士を連れて、北海道に落ちのびて来たのである。

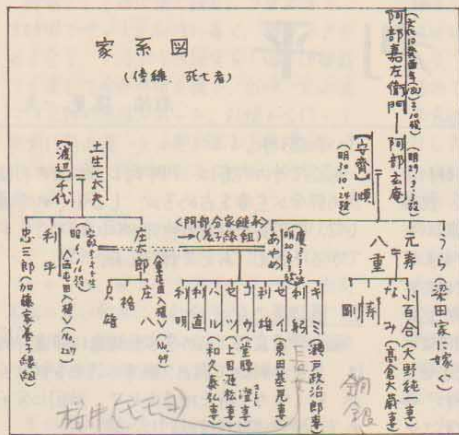
（「屯田兵の子」p1. 以下順次記入）

伊達に入った後、よりよい生活を始め、さらに明治政府の援助があるという奥地、すなわち当別、白石、山鼻、琴似等の辺地防備を兼ねて、奥地の開拓に従事していった。当時、屯田兵には、土地と反歩が与えられ、その上米の支給まであり、かなり有利ではあった。

3. 祖父阿部玄庵のこと

巨理藩、伊達邦成の家臣、阿部玄庵は、当初、現伊達市の近郊（今日の昭和新山近く）に入





伊達に定着したのであったが、折よく、開拓使が、今度、札幌の山鼻に、宅田制度という、耕しながら治安を維持しようという、一石二鳥の案をたてて兵の募集したのに応募したのが、この一行であった。すでに前の年の明治8年には、内地から琴似屯田に向って移住した1群のあとに、第2次屯田兵として山鼻屯田に向った集団であった。田村家先とも別れた一行は、いよいよ自由農民として、昔からの一切の主従の絆をたち切つて、新生活への第一歩を踏み出した人々であった。(pp.10~11)

くに入植したが、火山灰地であった為、米作には不適地だったらしい。イモ・豆・麦などを耕作し、一応は安定していたが、その後、他の人々と共に札幌に移り、玄庵夫妻は札幌区狸小路に住み、後に南5条西7丁目に移転し、屏つきを業とするかわり、漢法医の業務を行っていたが、七くなる直前ころは、軽井川(現手稲)の村医を勤めていた。

幕末の戦争の思い出は、あやめにとって、生々しい恐ろしい思い出であった。官軍は民家の鶏をりゃくだつし、家捜しして食糧を奪うので、女・子供は家財道具を井戸の中や、土にうすめて山へ逃げ込んだ。乱世の常として、単刀のあとに食糧難があつた。地上に生えた草という草は、食べつくし、おしまいには、草の根を掘り起こして食べ、到頭雨だれの落ちるところにたまった泥を流って食べるようになった。青ぶくれにムクんだ難民が、玄庵先で食を乞うあわれな姿に、米を施したあやめは、ひどく母に叱られた。あの悲しくも、なさない思い出の数々が、未だ見ぬ札幌の新天地へのあこがれいっぱい、中山峠の山々のかなたに、霧か霞の如く、遠くの空へ吹き飛んでいくように思えた。(p.8)

玄庵翁さんが、ますめのあやめを1人、鞍の前の方に座らせて、トボトボとせまい小径を登ってきた。明治5年、本願寺が布教と民生のため発願して、金5万両をかけて開通したのが、虻田から札幌に通ずる中山峠越えの本願寺道路であった。伊達藩主邦成は、幕末の戦いで徳川家の味方をした罪を問われ、藩祿を召し上げられ、家中の武士、百姓をかかえきれず、北海道移住を決定したのであった。家中の者が遠気船に乗って伊達に上陸したものの、有珠岳の麓は火山灰地帯で農作物は思うようにとれず、懐れない百姓は事に、家中の者は非常に難儀した。藩の一行は、先年、重臣を従え、十歳を過って当別に移住換えし、残りはお老を筆頭に、幾組かの夫婦・子供が

明治の初年入植後、祖父は長女夫妻に狸小路で宿屋を営ませたことがあったというが、その土地は、いつしか古着屋の雑貨屋を営む赤塚に貸していた。祖父母は、手稲の村医をしている伯父の許に引取られていたが、利維の小さい時に、冬の晩、祖父が危篤だという知らせに、父母は馬やり

に乗って、遠い手稲まで夜道を走って行った記憶がある。葬式がどのようにとり運ばれたかは、記憶に残っていない。多分、祖父の葬式は、孫の祭であったろう。(p.98)

祖父についてははっきり覚えていたことは、屯田の家の東向きに作られた腰高の窓に、利雄はよく飛び乗って遊んでいたものだ。秋の風が肌にしみる寒さを手稲山から運んできた頃、高窓から軒下の雨だれで洗われた玉石に、真夜かやまに利雄は描っこちる。泣き出す。祖父はあわてて利雄を抱き上げ、井戸端まで連れていく。荒縄の太くよられたつるべの井戸水を汲み上げ、板を幾枚か並べて造った1坪ほどの、やや傾斜した流しの上で、ササラタワシを水につけ、利雄の額に出来たたんこぶをゴシゴシこする。痛みは一層はげしく感じられて、また泣く。「あぶない、あぶない。これでこするとすぐ治るんだ。これからは、高窓に登ってなんねいぞ」とさとされる。

こんなことが再三あったので、祖父の思い出といえば、ササラでたんこぶをこすられることだけであった。漢方医者の祖父の打ち身の治療は、これが最上のものだったらしい。背の高い、頭のはげた、どちらかといえばいくらが層の厚い温情のこもったまたざしの祖父の写真を見るたびに、ササラとたんこぶを思い出す。(pp.98-99)

4. 伯父 元寿のこと

琴似・手稲方面の村医をしていた祖父玄庵が、明治29年3月3日、71歳で亡くなったので、長男元寿がそのあとをついで医療活動に従事し、札幌区南5条西7丁目1に居を構えて、山鼻村の村医となっていた。

5. 父 七太夫、母 あやめのこと

母あやめは、阿部玄庵と順の間の次女で、慶応3年3月3日生まれ、6歳の時、父母と共に北海道へ渡ったが、その蒸気船のペンギ

の臭いやらで、大変な酔いをしたのが、記憶にあったという。15歳の時養子を迎えた。

相手は、土生七太夫と千代の間の次男、利平で、安政5年5月5日生まれ、24歳だった。

五号の沢は利雄にとっては楽しい思い出の土地であった、よく利平に連れられて、かじかすくいに出かけたものだった。

西屯田通りを真直ぐつきぬけて、馬頭観音のわきに、小さな古ぼけたお堂が建てられてい

るところにつきあたる。右手には、藻岩山から、豊平川に向かって下り勾配のついで

た峯が急に切れて崖になっている。それが軍艦岬だ。利平が屯田に移住した時に通って、割栗の角からこの崖を見て、いよいよ札幌へ辿りついたのだなあと考えた。あの青年時代の昔が、思い出されるのであった。家から五号の沢まで2里あまりもあろうか。このあたりは割栗八垂別ともいって、山鼻屯田兵に割当てられた燃料用の薪取りの林であったとも聞く。八垂別小学校が、今の藻岩小学校になったのか。(pp.139-146)

利雄の父利平は、妻のあやめを冬、湯宿に馬そりで定山溪に運んで来るのが、毎冬のならいであったとみえて、佐藤伊勢蔵とは懇意の間柄であり、伯父の村医とも面識のある間柄であったから、利雄の訪ねる度に、利平や伯父の動静をたずねたりもした。



K. Sirai 氏画 (1929年)
〈記憶画〉
石山街道から軍艦岬を経て
定山溪への道 (明治20年頃)
(1年組 関谷 昌福氏)

幾曲りして道は遠く狭く。9里の道を、9時間でやっと定山溪に着く。持ってきた米5合と、1泊50枚の銀貨を1個、伊勢蔵に手渡しして今夜の宿を頼む。当時、定山溪には2軒の湯宿があった。札幌から行って手前が高山湯、少々奥に進むと吊橋があって、向う岸に今の定山溪ホテルの佐勢蔵の湯があった。

利平の定山溪行の目的はカシカ釣りにあった。旅の疲れなど一向にこたえるものではなかった。米と金を渡すや百や川に出る。木綿の黒い縫糸に魚釣針をつけ、みみずを刺して岩と岩との間に垂らす。いきなり頭の大きなカシカが釣れる。(PP130~131)

その頃の定山溪には定山和尚は居なかった。定山和尚の死について、不確かながら言伝えられるところによると、お正月の松飾りをとりに行っただま戻って来なかったということだ。利雄の祖父らの一行が、伊達紋別から中山峠越えをした時に、宿を貸してくれた定山和尚だったのに、遂に和尚の姿を見ることが出来なかったのは淋しかった。伊勢蔵の湯船は半分小屋かきかしてあり、あと半分は露天風呂になっていた。

(PP132~133)

時は明治9年5月29日、あやめが利平を養子に迎えたのは、数え年14歳であった。9ヶ年上の利平は、同藩の土生家の二男に生まれ、屯田兵の資格を得るために結婚を急いだのであろう。あやめが19歳になって長せを産むまでは、官から与えられた宅地5反歩の開墾に精を出し、やっと食糧として、そば・麦・豆類を収穫出来るようになった。宅地の裏に一筋の川底らしい古い流れの跡が近々と村の南から北へ通るくぼ地を形作っていた。豊平川の交流の古い流れがここを通過して、桑園方面に流れていたものらしい。宅地は砂利のところが多く、開墾の時掘り出した玉石が、うす高く畑の片隅に積まれてあった。屯田の長さは端から

端まで南北26~27町歩にもわたり、その間に区切られた1戸1戸の土質はまちまちであり、肥沃なのや石からの土地があったり、極めて運不運のあったことが、屯田兵の耕作意欲を益んにしたり、または消沈させたりしたものだ。

当時は未開墾地を、耕やせはいくらでも自分の所有地にすることが出来たので、官の開墾奨励等とあいまって、掘れ掘れ、取れ取れで、競争して開墾したものだ。家族の多かったせいか、利平夫婦と隣の吉吉夫婦は耕作が上手で、村でも1、2の地所持ちとなった。あやめが4番目の利雄を、規則正しく2歳おきに産み落した頃は、畑10町歩の地主になっていた。(PP12~13)

りんごの空箱に腰さおろし、足には下駄とも靴とも見分けかねる履物をつっかけ、目はあらぬ方を眺めている。年の頃は五十路を2、3手前の、食卓も見えず、ほろに包まれた男の髪を、バリカンでチャキチャキ刈っているのは、母あやめである。

男はたまって頭髪を刈ってもらっている。屯田のはずれから、毎朝、雨の日も雪の日も札幌方面に出かけ、夕方にはきまって利雄の家の前を通るオシの姿に、いつも心痛む思いで見すごしている利雄にとっては、母の床屋姿に奇異の感を抱かざるを得なかった。髪を刈ってもらっているうちも、ボリボリ肌をかいていた。多分シラミが沢山ついていたのであろう。オシに限らず、あわれな旅人を見れば、何かしかの施しをせねば気のすまぬ性分に生まれついた母の情を、有難いものに思えるのであった。

冬の日など、吹雪の中を札幌から帰るオシに、頭ほどの大きさの檀り飯を持たせて帰すことも再三であった。目も白内障であったろうか、はっきりせず、物言わぬオシに施す母の心根は、日頃の生活音を忘れさせる救いの途であったのかも知れぬ。

(PP109~110)

6. きょうだいのこと

- i) 長女キミ：瀬戸政治郎専、死亡。
- ii) 長男利雄：札幌師範学校卒業後、札幌西創成小、余市大川小、札幌西小学校を歴任して、61歳、東京で死亡した。

利雄の兄は附属小学校を優等で卒業して師範学校に入学し、寮生活を続けていた。兄は百姓をひどく嫌った。労働そのものつらさも原因の一つであつたらうが、都会生活の華やかさを毎日目の前に見せつけられては、青年の心かその方向へ動いていたのは、無理からぬことであつたらう。まして畑作だけで口をきくする屯田兵の生活は決して安定したものではなかつたし、隣近所の青年はわれ先に役所勤めを志して、月給取りに就職してゆく有様を見聞きするにつけても、1年中働きつづめの百姓生活は、むしろのろわしく、うとましいものに見えたのであろう。一等兵を父に持つ兄の肩身のせまさ、将校・下士官の威ばりくさる姿、これは学問の有無によって決定する運命と見てとつての事かも知れなかつた。

(PR.138~139)

兄の音楽好きの感化を受けて、利雄は明笛の名手であつた。函館出身で師範学校に寄宿していた兄の友人で、函館・江差方面に流行している神楽笛の上手な人がいた。それを兄がよく利雄にふいて聞かせた。

(P.128)

- iii) 次女セイ：山鼻尋常小学校に通学したが弟妹が多かつたので、背中に弟または妹を背負い、そして手をつないで学校に通つたものだった。卒業は4年で、その後専ら、農作業の手伝いと、家事手伝いに従事し、その間、有島武郎のお手伝さんをしてながら遠友夜学校に通つた。校長は新渡戸稲造で、あとに半沢洵が代行した。

有島武郎は農学校科の教授であり、遠友夜学校の在學生が主な先生であつたが、姉セイがお世話になつていたので、ご恩報い

句集 東田セイ集 第1集

昭和21年5月30日集
小樽川柳社発行 47頁 6巻 4

セイちゃんの記
北大へ向かう道々白い花
いろの夢がめづいた手附台
麻酔から醒めて入道と雲
五階から町見望るせば基揚めき
三日月を二つに見せて面白し
マツサイジ世間の話置いて行く
病室に歌を知らせる赤トンボ
消えて泣いてくれるな子よ友よ
五十年積り積つた溜め涙
病棟に縁ない猫の声あわれ
細りゆく腕に注射の跡が増え
配膳の匂わせ来るおひるま
配下あんまの杖と靴の音
頂浪れの舟に歩いた五歩十歩
おひるまの風ごつせり置いて行く
風船を窓につらして病みつづけ
灯を消して風の光りへただ照し
夢に泣く夜もりの淋し一人部屋
空越しに春の陽を逢う快復朝
たまに來た見舞いながさかり言
平熱になつて壊りの目立つ部屋
ベツトからネオソ見飽きた一か年
退院の許可に嬉しく眠つた夜
退院の朝音を吐いた日を笑い
バラ活けて待つた我が家へ帰つた夜
セイちゃん可愛いられてまじ

小樽川柳社 (21)

句集 東田セイ集 第2集

小樽川柳社所属

人生の門出を託す體歴者
刺刺の子が出らまわら大掃除
花柳を仮装にさした大掃除
供米を納めて帰るソリの鈴
夫業へ余日もわけて暮れてゆき
夕月のうき世を捨てて願枕
團長のしびれの切れる旗を手に
理にまけて父はなご寝でしま
鬼の面取つてやさしい年男
ニシン焼く匂いたたふ雨となり
花嫁のカツラへそつと通の風
不器量にならんだ店の落りンゴ
ランドセル買つて春待つ子の機嫌
思ひよる春へ柳の芽の白さ
母の手をぬくみのこる握りめし
孫ど居る日向ボツコに猫も来る
うっかりとあくびの移る日の老夫婦
ハイハイの子に野にあり母のひざ
いけ花もブライムに染つてゆき
晴天へ吸つた箱園の陽の匂い
夫業へアクセサリのアドバルン
新学期それそれ孫の無心来る
測量のレンヌにうつる曲線美
イヤホンを抱いて映画の通になり
長き夜の君待つまでオルゴール
父さんをまわつて小さくかきあげ
ランダムにさらた米にかか
春の手のぬくみのこる握りめし

小樽川柳社 (21)

「はかき句集」 堀見一筆編

のため、弟利雄は、札幌師範在学中、教師として暮らした。

なおセイはその後、東田基見と結婚し、小樽市花園野に居住したが、晩年10年間くらいは川柳をたしなんでいた。

Ⅲ) 次男利雄：後に詳記。

Ⅳ) 三女コウ：堂崎 澄子。死亡。

Ⅴ) 四女セツ：上田源松子。死亡。

Ⅵ) 五女ハル：和久森弘子。死亡。

Ⅶ) 三男利道：学校で先生とぶつかり、骨髄炎となる。北辰病院に入院後、手術のため札幌市立病院へ転院したが、結果は思わしくなく、夭折してしまった。

弟の足の痛みは幾日も続いた。熱は上がり、はなした。開場病院に入院させることにした。レントゲンのまだなかった時代のかなしさに、弟の骨膜炎は内股が真赤にはれ上がるまでは、医者には病名をきめかねていた。利平は憤慨した。すぐに札幌病院に入院換えしてしまった。患部を切開した医者の顔に、膿血が飛び出してベットリかぶったほどに化膿し切っていた。

永い間節下にたたくんで、手術のすむのを待っていた利雄には、痛々しさを胸がいはいてあった。骨をけすたと聞いた時は、助かるか死ぬかわからぬという生命よりも、弟の痛みの方を気にしていた。

手術の経過はよかったが、幾月もの入院生活に、弟の足はますます曲ったきりで、口から膿が絶え間なく流れた。退院後も、いろいろ端で、ひとりで膿の始末をしている弟の姿を見るほど、痛々しかったことはなかった。特に可愛いかった弟の不慮の不具は、利雄の気を消沈させてしまった。

小学校2年頃の弟はきかん坊であった。頑固な弟を前に坐らせて、「おれはぶ前を大学に出してやるから、うんと勉強しろ」と諭したことがあったが、それも今では、空のそみとなってしまった。

利平の生活は、決して楽しいものではな

かった。苦しい生活のように思えた。

百姓、石切山の駈籠仕事。ことに前年夏の、石切山から石材を積んで本府の道を通る途中、凄まじい風を吹き飛ばされ、それを拾いそこねて車の下敷きとなり、永い間入院して、やっとちんばを引引き仕事の出来るようには治ったものの、冬の仕事などは古傷にこたえ、遠道をすると痛むとよく訴えていた。

今度の弟の入院で、莫大な金が入用になった。ついつい土地を手はなして、それで治療を続けたのであった。開墾の苦しみが消え失せて、やがて楽しい生活が来るべき時に、一枚の汗の結晶を失うことは、利平夫妻にとっては、耐え難い悲しいことであつたろう。土地を離れる百姓ほどみじめなものはない。1町歩1500円で土地は、本府の人の手に渡った。(11.177~178)

利平家では、弟のために莫大な入院費を使い、働き手のない家としては、作物の収入だって、出賃を支払い、肥料代を払い、税金を払うと、あとには赤字が出るくらいになっていた。9人の子供を育てるには、米は全部買わねばならなかったし、兄、弟は学校通いである。妹も次々学校に入っている。ただ2人の姉は家事。農事手伝いとして家に残っているだけで、あとは皆消費一本の生活であつてみれば、前々年手に入れた土地の売り上げでは足りず、今回売りに出された土地は、拓銀に相当に入れて長期貸付を受けていたのであった。15年年賦償還の貸付金に対する元金と利子をあやめは気に病んでいるのだった。

利平は口には出さないが、先年の痕のいたみで以前よりは働きが思うように出来なかった事も手伝って、働いても追いつかない自分の生活を、どうしたら切り替えられるかに、頭を悩ましていたらしい。日頃重い口が一層重くなっていった。

土地売買の話は段々具体的に進んで、遂

に2,000円で手離すことになった。朝から登記役場に行った利平は、現金2,000円を銀行に預金するのは安全と思って、登記役場から帰るその足で貯蓄銀行に向った。ちょうど銀行の閉店時間が少々廻ったあたりに到着した。頼んで戸をあけてもらって、預金係の窓口に現れた。預金係は、何やらちょっとためらう風に見えたが、利平にはただ一心に預け入れてもらおうという心でいっぱいだった。

ところが大事件が持ち上がった。昨夜預金した銀行は、翌日から支払い停止の広告を出したのだった。利平の驚きは並大抵のものではなかった。すぐに銀行にかけつけたが、銀行の門前は黒山の人だかりだ。

まんまと2,000円の大金は、銀行にしてやられた結果になった。

それ以来、家中は暗くなるばかりだった。銀行は再三、預金者にはご迷惑かけませんという声明文を新聞に広告した。

そうしているうちに雷となった。貸付をした拓銀から、元利支払いの通知書が届けられた。1年後に、やっと貯蓄銀行から、300円くらいの預金払戻しが行われたきりだった。

泣くにも泣けない、情ない年が明けた。

(pp.145~148)

10) 四男利明：札幌二中在学中、助膜炎で死亡した。

7. 阿部利雄氏自身のこと

以下、利雄氏の著書「屯田兵の子」「苦難坂私学道 第1集」「登代世」の略歴の項をベースに、利雄氏に補足していただいたものを表記すると。

(明治)

23.11.16. 山鼻西屯田227番地(現、札幌市中央区南9条西13丁目)に生まる。

32.3. 山鼻尋常小学校(4年)卒業。

39.2. 西創成高等小学校(4年)卒業。

42.3. 北海中学校(5年)卒業。1909年

43.3. 東北帝国大学農科大学(理、北大)

水産学科(1年)中退

44.3. 札幌師範(2年)卒業。

44.4. 野幌小学校教頭。

45.4. 札幌豊水小学校訓導。

(大正)

3.3. 全校 退職。

3.4. 仙台予備校入学。

3.8. 第二高等学校(4回)入学

6.3. 全校 卒業。

6.4. 東京帝国大学経済学部入学

9.3. 全学 卒業。

9. . . 住友合資会社東京販売店入社。

11.5.12. 塚本とよと結婚(奥様のことは、利

雄氏の著書「登代世考」に詳しく省略)

12.2.27. 長男、智次(於東京)出生。

13. . . ベルリン商科大学(ドイツ)留学

(2年間)

(昭和)

3.10.10. 次男、芳郎(於東京)出生。

4. 倉敷労働科学研究所入所。

4.12.21. 長女、とし子(於東京)出生。

8.7.31. 三男、勇(於倉敷)出生。

11.1.17. 四男、学(於倉敷)出生。

11. . . 倉敷労働科学研究所解散。

14. . . 大阪府地方技師就任。

14.8.6. 五男、昌信(於大阪)出生。

16.4.10. 二女、よし子(於大阪)出生。

24.3. 北海学園大学創設 事務局長、教授

34.3. 北海道学芸大学教授。

38. 全学 退官。

40.3. 北海道産業短期大学創設 理事長。

学長。

46 ソ連へ旅行。

47.11.17. 専、とよ死亡。

48.4. 北海道産業短期大学名誉学園長。

今日に至る。

以上でも、そのバラエティに富んだ人生はおおよそ把握できるが、当時をより鮮明に浮き上がらせる為に、エピソードなども記述していこう。

小学生の頃 家では夏、大豆・亜麻・ビール麦などを耕作し、札幌から10人くらいの出面を雇っていたが、この頃すでに、馬の口取りをしてあせ切りなどもし、また麦刈り・麦打ちなども、出面に負けぬくらいやったものだという。

利雄の通学当時の明治30年頃、山鼻小学校は東西4町、南北2町もの広さの敷地をもち、石山街道沿いにあった。

明治14年、明治天皇行幸の時、お野立所を学校前の広場に、木でやぐらを高く組み上げ、その上から屯田の各戸が立木の茂みからはっきりと眺みになれるようにと、わがわが屯田兵屋に、1本1本、日の丸を立てさせたものだった。その折、学校と中隊本部を中心にして練兵場が東西両屯田の中に広々と横たわっていた。お声かかりの柏の木付近の練兵場の一部を、屯田兵の軍服姿のままの農作業を天覧なされたのは、学校前の広場のお野立所からだった。

利雄が生徒の時には、お声かかりの柏の木はかなり太い大木であったし、記念碑も柏の木に登るとすぐ足の届く下に立てられていた。今の柏の木は、もとの老木のひこ



明治23年焼失前の校舎 R. Sirai 氏画

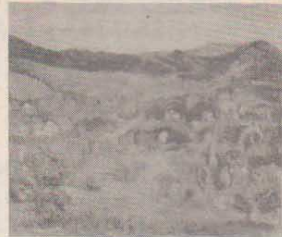
本画は、類似屯田小学校の写真と模写したものが、同型のものに違っていた。

新築した後は、右の画にもあるように、平屋建てとなった。

〔1年5組 関谷増夫 撮影〕

明治30年頃の記憶画

〔山鼻小学校より〕
北海道芸芸大学札幌分校
美術部学生画（昭93）



円山方面を眺む Ta. Nara 氏画



西屯田

山鼻井田基地（道路わき）
東屯田

石山街道から北方、石狩方面。
（南1条西10丁目まで限る：馬車道だった）



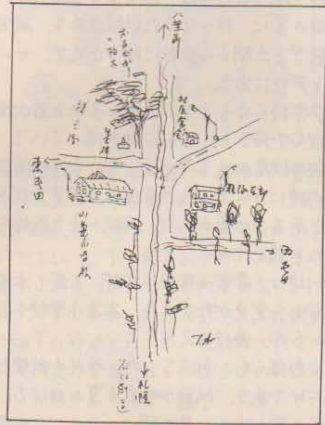
中島方面を眺む R. Sirai 氏画



ばえだという人もいてはつきりしないが、柏の木は変ったにしろ、山鼻小学校は明治23年に焼失したが、敷地は元のままであった。生徒達は、練兵場とも運動場ともつかない共通の広場を、わがもの顔にかけまわり、到底東屯田から西屯田へのあの広大な野原は使い切れるものではなかった。それに目をつけた札幌正当局は、町村合併の折に、学校敷地として猫の顔ほどの狭い地積を残し、全部無償で取り上げてしまった。

当時、百姓上がりの村有力者は洞織袴で、軍人は正装で町村合併祝典に列席し、2合の冷酒で万歳三唱したが、冷酒は実は、極めて高い犠牲の秘められた毒酒であった。

(pp.27~28)



山鼻小学校附近図 (p.56)

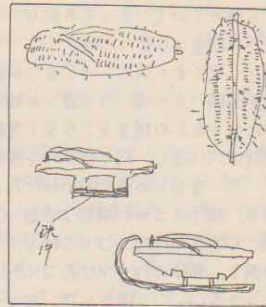
当時の子供の遊び

馬やりあそび:

スケート: (右上图参照)

土こ揚げ: 3月、堅雪の頃。

ネッキ打ち: (右下图参照) あたかい日
がしを浴びた家の軒下の雪の消えたころ。
子供はネッキ打ちに興ずる。鹿の角また



スケートの進化 (p.104)



ネッキ打ち (p.46)

のような枝ぶりの面白いらんごの枝(雷のうちにせんでいされている)を見つけきては、柄を長くとり、土に打ち込む根元の太目の枝の先をナタで切る。股木のあるものが喜ばれるのは、柄から根にいたる途中に股木をもつネッキは、敵のネッキを倒すのに有利な役目をするからだ。これを10本くらいは作っておく。ジャンケンポイで負けた者は1本土に強く打ち込む。敵はこれに斜めに、相手のネッキを倒すような角度で強く打ち込む。相手のを倒したら勝ち。自分のものにする。汗を流して、かわるがわる打ちあう。けがをしないように、相手は遠退いて、敵の攻撃が失敗してくれるようにと念い

ながら眺めている。ネッキの数は、子供の世界の財産の尺度になる。

コマ遊び：全く雪が消え、カゲロウが薊え出た草の頭に立つ頃、コマ遊びが始まる。麻なわの手もとの握るところを1厘銭か2厘銭の穴に通し、残りのなわを房状にして、赤・青などの色で染めわけたりしてある。相手のコマが威勢よく廻っているところを目がけて、コマを打ちつけるのである。自分の打ちつけたコマが、相手のコマをひっくり返して、廻りつづけると勝ちである。デアボロ・ヨーヨーの流行するまではコマが全盛だった。

パッチ遊び：東京のメンコである。明治27年、日清戦争の頃は、原田重吉の玄武門破り、白神源次郎のラッパ卒の錦絵パッチなど、極彩色の勇ましい大小さまざまのパッチが流行した。

おにごっこ

ねずみとねこ遊び

竹割：男の子も女の子も座って出来る遊びで、尋常小学校の頃は、学校へ持って行って盛んに遊んだ。「1つ、2つ、3つ、4つ」と順番に、かけ声勇ましく、1尺ほどの4本の割竹を、右左の両手に各々2本ずつ握ったり、右手で4本ひとまとめにして握ったり、手の裏に乗せたり、さまざまの遊びの組合せを、4本の割竹で上手にやったものだ。途中で失敗すると、他の人に順番をとられるという仕組みで、全部の遊びをおわると、1点勝ったということになる。

あやとり：今のとあまり変わらない。

手まり遊び：かなり昔から伝わる女の子の遊戯らしい。その頃、まだゴムまりがなかった。赤青黄色のさまざまの糸でつけた綺麗な綿のかたまりで、見ているだけでも美しく、楽しいものだった。手まり歌はまた面白い。「向う通るは きむすめじゃないか 7つ8つから学校通い……」などと、節面白く歌いながらつくのであ

った。酒屋のむすめの歌もあったように思う。

陣取り遊び：高等小学校へ行ってから盛んになった。これは戦争の影響であつたろうと思われる。源平2組に分れて敵の陣を取る。勇ましい遊戯であった。

デンゴロー遊び：これも高等小学校時代に流行した遊びで、前の人の膝にしがみつき、そのまた後に人がしがみつくと、まるで猿が月をとる時の格好よろしく、数珠つなぎになって敵を倒す遊戯であった。汗をかきかき、休み時間は運動場で、所狭しとやったものだった。(pp.61~62)

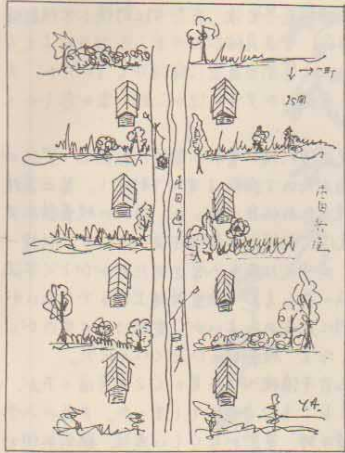
「ただいま」とも何とも言わず小学校から帰った。家には誰一人留守する者もない在田の家に、持って来た勉強道具を、風呂敷包ごと土間から座敷に投げ込んで、サーッと戸外に出る。

夕方暗くなるまで、近所の子供と遊び放題遊んで帰ると、畑から姉が帰っていて、夕飯の仕度が出来ている。そのうちに隣家との境についている馬車道に、ガタンゴトンと荷馬車の音がして、両親がとり入れた痕など續んで帰ってくる。

利雄は、尋常小学校4年間、1度も本を復習した覚えがなかった。高等小学校4年間のうち、最後の2年くらいになって、やっと勉強らしい勉強をした。それも試験勉強だけである。試験が始まる夏の日はずし暑く、蚊が来る。昼の間は、りんごの木の下にむしるさ敷き、机を持ち込み勉強したものだ。時には姉妹に邪魔されぬよう、高いりんごの枝にやぐらを組み、その上で勉強もした。すこぶる気持のよいものだった。夜は座敷に蜘蛛を吊り、その中に机を入れて勉強した。ランファから立ちのぼる石油の臭いをかきながら勉強したものだ。

辞書など欲しがりもせず、参考書など、あつたものかどうかが、とんと頓着なしに、教科書を暗記するだけだった。家には1冊

はかり、和といの千字文とかいう辞書らしいものはあったが、勉強には何の役にも立たなかった。暗記が勉強のすべてであった。



屯田通り (P.117)

当時の風潮は、若者は銀行の給仕か、官庁の走り使いになることを望んだものだった。それで利雄氏も、道庁の給仕になりたいと思っていたという。ところがある日、お父さんが突然、「将来は勉強しなければ駄目だ」といった。しかしにわか覚悟の悲しさ、札幌中学校(現 札幌南高校)に入学許可されず、已むなく北海中学校に入った。当時の北海中学校は、他校からの停学・退学・放校がザラで、利雄氏が第4期生は、入学者40~60名中、卒業出来たのは、僅か10名だった。

9人の中に育った定男は、月給取りになる決心をした。それは高等小学校4年の春であった。給仕として官庁に雇われ、月給で父の手助けをすることにした。兄はまた師範在学中で、経費の要る最中であった。

卒業を目の前に控えたある日の事だ。利平は利雄を呼んで、

「今は学問の世の中になった。渡辺源五

郎に言われたのだが、息子は学問をさせぬと、これからは駄目だ。とナ。お前、中学校に入れ」と。

利雄にとっては、寝耳に水の出来事であった。

利雄の学業成績は、クラスで5~6番であった。試験がある前の晩は、こたつに入って本を1課から読み始め、1夜づつで暗記し、翌日は1字1句違わずに答案に書いて帰って来た。書いてしまったら、すっかり忘れてしまった。利平は無算であったし、母もまた無算で、あきめくら同然で、片仮名だけは辛うじて読んだようだった。医師の娘で、兄を医師に持つ母がこの有様であったから、他の屯田兵の一般の教育程度はおして知るべしである。自然利雄の勉強などは学校任せであった。その頃、利平も母も、学校へは1度も頼を出したこともなかった。また父兄会などというものもなかったようであった。

こんな学校生活の上で育った利雄にとっては、中学へ進むなどは、思いもよらぬことであった。かくて一中の入学試験には失敗した。入学試験には「以為」というような国語の問題が出ていた。数学の代例で失点したのだろうと思っていた。暗記物の試験だったらなあど悔やまれた。

(PP.140~141)

利雄は欠席することもなく、せつせと中学校へ通った。当時の私立中学というものは、極めて財政的に基礎の薄弱なもので、年の瀬には、校長が1人で高利貸の門を叩いて、年末の賞与やら月給を支払ったりしたものだだった。

先生といったら、40、50の英語の先生、ノッポの数学の先生、ザンバラ髪の漢文の先生、朝からあみきをきしめて見える幾何の先生、片目の化学の先生、札幌神社の宮司の国語の先生、東京外語出身の英語の先生。

「師は嚴格なるを良しとす」とい利雄が

大きくなってから気付いたことだった。

(pp.65~69)

いつの頃からか明暗を覚えた利雄は、毎日のように、暇さえあれば書をふいた。

夏の夜は、最も適当な時期であった。闇の夜もよし、月の夜はなおよい、明月よりは三日月の夜は興がわく。

笛によって利雄は、自然を友として、一切の世の憂きこと、苦しさを忘れるのであった。一人自ら楽しむという習慣は、こうしてはぐくまれていった。他人を相手とせず、人を頼りにせず、独力で自分の運命を開拓していこうという意気が、こんなことで培われたのであろうか。(11.28~12.9)

北海中学3年から5年にかけて猛烈した。自分でもやれば出来るようになるという自信を、この時持ったという。かくて東北帝大農科大学(現北大)水産学科(2年制)に2回生として合格出来たが、北海中学の当時の校長、戸津高知先生は、予科へ入れば学士号が得られるのに、惜しいことだ、と言ってくださった。当時、札幌市長というものが権威の的であったことも手伝って、大きく飛躍してやろうと、野心に満ちてきつった世相が、そう言わせたのであろう。

水産学科での研究は、サルカニの解剖に始まり、海藻類の研究など、地道な毎日がつづいた。自然科学と人文科学との抗争が、頭の中で葛藤していた。子供の頃から、百生以外の生活しか見ていなかった者にとって、大学という世界を見る機会に恵まれたからには、農科大学はあまりに小さく感ぜられ出した。

しかし当時の利雄氏にとり、学費の点ではゼロに近かったこと、そして長兄は師範学校で給費生であったこと、従って父利平氏から長兄以上の学校には進学させないことを宣告されたことが、遂に利雄氏をして独立宣言となって、両親から離脱することに踏み切らせたようだ。

まず学費を作ることを考えた。師範の第二

都に入学し、教師をしつつ給料を貯蓄し、そのお金で高等学校に入り、東大を目指すことであった。当時は奨学金制度などなく、自力で這い出すよりほかに、途はなかった。

札幌師範卒業後、ただちに野幌小学校教頭を拝命。普通月給22円のところ24円が与えられた。1年間当直室に寝泊りしていたが、夕方、手稲山が夕空に浮かぶ時、家か恋しかった。

その後札幌の豊水小学校に転勤し、実家から通えたので給料はすべて貯蓄し、第二高校受験のため仙台へ向った。当時の校長鈴木又徳氏は、利雄氏の受持生徒の中から、札幌一中・二中へ10名も入学させたのがひどく不満であったらしく、教室管理上困るのではないかと、学問に走るのもよいが、実務につくものがないなくなる。校長からひどく叱られた。

仙台予備校へは4月から2か月通ったが、得るところなくやめてしまった。8月の入学試験の時、東京かららしい者は、銘仙か何かのピカピカした着物を着、長髪に金ふちメガネまでかけている者もいるのに、利雄氏たるや、木綿の筒袖の袴で、丸刈り頭の田舎風、ひどくみじめな思いをした。

二高在学の3年間は、仙台市東一番丁に住居する、遠い親戚筋の医院に書生として住み込み、家庭教師をしたが、戸津高知先生のご配慮によって、日の丸農場主、松本菊次郎氏から、東大約1年間、奨学金をいただいた。

その後大学事務局の斡旋で、博文館社長、大橋新太郎氏から奨学金をいただいた。また小企業へ商法の講義をし、給料をもらうこともあった。

大正9年、住友合資会社に入社したが、政財界との癒着に腹を立てて退職した。

なお利雄氏を語る場合、忘れてならぬことは、第二人を給料で失っていることである。昭和14年、大阪府庁に任命され、戦時産業戦士の教育を担当したが、日本で死亡率の最も高い結核から青少年を守らねばならぬと考えた。ここで日本で初めて、年間3万人を3年

中代廿考
阿部利雄

間、終戦まで、大量のBCG接種を行なった。

以後、終戦直後の生活難は利雄氏の著書「豊与廿考」に詳しく、昭和24年3月からの北海学園大学創設に関しては「若狭坂私学道第1集」に詳しいので省略する。

8. 最後に

87歳になん人とする利雄氏は矍鑠そのもの。そのほとぼり出る情熱にただたうたれ、屯田二世のいまに生きる覇気に感動して帰ってきた。

利雄氏の人生観は、「金は人を求めて追いかけるもので、人が金を追うてはならぬ。追えば金は逃げるものだ。無から有を生ずるの哲学を追求すべきだ。それには、発想と努力あるのみ」と。



阿部利雄氏
昭和24年10月
【『経 関谷増史による』】

- ①マンション
- ②旅館
- ③バー、スナック、飲食店
- ④薬屋
- ⑤料理屋
- ⑥札幌高等裁判所官舎
- ⑦貸本屋、クリーニング取りつぎ
- ⑧雑
- ⑨温水荘
- ⑩文房具店
- ⑪病院
- ⑫名刺店
- ⑬カラス店
- ⑭衣具店

- ⑯飲食店
- ⑰北光社
- ⑱病院
- ⑲カーアクセサリー店
- ⑳アポルト
- ㉑金社倉庫
- ㉒小会社
- ㉓小会社

その他は、一般住宅。
(同じ、家の形でなく、敷地をもとにしました。)

<感想> 住宅は官舎が多く、同時代のものが多かった。アポルト、マンション、飲食店などが多く、それらの建物は斬しかった

あとがき

教諭 塩見一夫

今日まで、札幌南高校1年生には、夏休みのフィールドワークを通じて、郷土の実態に触れてもらってきた。

今年は山鼻屯田百周年にも当たり、「山鼻屯田兵」の1戸1戸を担当してもらった。

その成果があまりにも見事なので、これらが死蔵、あるいは遠散するを座視するにしのびず、思い切って1冊に纏めることにした。

冷夏といわれた昭和51年の夏も、生徒らが調査を始めた夏休み当初は、不運にも30数度の毎日がつづいたが、生徒らはそれにもめげず、不案内の土地にもかかわらず、丹念に調べ上げていった。文字通り涙と汗の集大成。

そして、わざわざ本校でご講演くださった太田武先生(屯田=世)をばいぬ、多くの方々のあたたかく、しかも懇切丁寧なご指導の賜物として、ご覧のように、高校生の調査としては最高級の作品が出来上がった。

生徒らは、この調査を通じて、百年前の鬱蒼たる大原野に、辛酸をなめた開拓者の人に接し、さらに人間の心の機微にも触れ、将来の人間形成に大きく寄与することになる。

なお私自身も生徒と同様資料をあさり、実際調査を担当し、生徒の苦勞を実感として味わったし、この冊子編集もまるまるひと月、不眠不休でようやく完成させた。

さらに心強いことは、昭和40年度の1年生の作品を10年ぶりで隅の目まで得たことで、これにより該当地区の10年間の発展の度合が比較出来るのである。その上、先輩と後輩を結び絆ともなれば、ますますこの冊子の存在価値、高まろうと思うのである。

山鼻屯田史料はあと2年は調査したい。既に過ぎに失したきらいはなきにしもあらずだが、しかし今日を以て、もうないだろう。今回凍れた家を埋め、さらに不備な部分を補って、後年、「定本 山鼻屯田史料」などを出版出来たら、などと夢見ている。

願わくは先輩諸士のご叱正を頂き、より完璧なものへと期しているのである。

最後になりましたが、山鼻屯田期成会会長佐藤真先生と本校校長松本利一先生に巻頭言を飾っていただき、錦上添花を添えていただきました。ありがとうございました。